ここからは遠い国

岩崎正裕

【登場人物】

長南義正（ヨシマサ）＝信徒Ｂ
長南仁
長南智子
長南信子
長南礼子
長南真理
兼光＝信徒Ａ
小松
日向
園部かおり
別所ユキ

夜の林道をエンジン音が近づいてくる。耳をすませばカーラジオから懐かしいフォークソング、かすかに。と、何かにぶつかるにぶい音。停止する車。運転席のドアが開く。

信徒A　おい、降りろ。（懐中電灯の光り）
信徒B　ああ？
信徒A　何かにぶつけた。…今。
信徒B　嘘。俺気ぃつかへんかったで。早よ行こうや。
信徒A　降りて見てみろよ。
信徒B　何を…。
信徒A　…いいから、その音楽止めろ。
信徒B　何で？
信徒A　何でそんなバカな曲ばかりやってるんだ。
信徒B　しゃあないやろ。ラジオに言うてくれや。たまにつけたらこういう特集やったんや。（消して降りる）
信徒A　おい、何でエンジンまで切るんだよ。
信徒B　おお、寒ぶ。（あたりを見回し）ごっつい霧やな、全然星見えへん。（鼻歌）
信徒A　おい、それ。
信徒B　何や。
信徒A　その歌、やめろ。
信徒B　ああ…、はいはい。
信徒A　どこ見てんだよ。

信徒B　どっかぶつけたんやろ。
信徒A　前じゃない。後ろだ。さっきバックした時。
信徒B　（後ろに回りながら）あーあ、えらいとこで迷てしもたなあ、これ。
信徒A　やめろ、それ。
信徒B　何。
信徒A　関西弁。
信徒B　何で。
信徒A　何か、ノンキなんだよ、お前。もう夜中だぞ。
信徒B　しかも、こんな山ん中で。
信徒A　誰のせいだ。
信徒B　霧のせいやろ。しゃあない。…何に当たったんや。
信徒A　岩だろ、…そこの木か。
信徒B　それにしては、全然傷いっとらへんやないか。…ひと違うか。
信徒A　何が。
信徒B　いや、ひとひいてへんか。
信徒A　…バカ、ひとがいるわけないだろう。こんな真夜中の山ん中に。
信徒B　俺らいてるやん。
信徒A　何か、他の動物だ。
信徒B　他のて…。
信徒A　鹿とか…。
信徒B　馬とかな。
信徒A　バカ。

信徒B　おう、それそれ。
信徒A　もういい、乗れ。
信徒B　何命令してんねん、お前。
信徒A　置いていくぞ。

信徒B、助手席に。が、エンジンかからない。

信徒A　くっそー。
信徒B　替わるわ。
信徒A　（降りる）お前がラジオばっかり聞くからだ。それでバッテリーが…。
信徒B　アホか。そんなええかげんな車、レンタカー屋が貸すかい。ガソリンは…。
信徒A　向こうを出る時にスタンドに寄ったろう、お前が。
信徒B　ああ、そやったな。
信徒A　どうするんだ。今晩中に着く約束だろうが。
信徒B　誰がそんな約束したんや。
信徒A　俺だ。悪いか。そう言われたんだ。今晩中に着くようにって。
信徒B　おい、携帯。
信徒A　そこにないか。ダッシュボードの上。
信徒B　おう。（プッシュする）
信徒A　使えんぞ、圏外だ。

突然どこからか、女の声。

女の声　オカエリ…。
信徒B　えっ？
信徒A　何だよ、えって。
信徒B　今、何か聞こえへんかったか。
信徒A　何かって、何だよ。
信徒B　いや、声や。女の…。
女の声　…オカエリナサイ…。
信徒B　ほれ、おかえり…。
信徒A　おい、ラジオ消せ。
信徒B　いや、消してるって。
信徒A　お前の耳にこびりついてるんだ。さっきのラジオのつまらん歌が。
信徒B　おい、どこ行くねん。
信徒A　このままじゃ着くのは朝になるだろう。
信徒B　歩くんか、ここから。
信徒A　電話入れてくる。
信徒B　あるかい、こんなとこに。
信徒A　確か２、３キロ下がったところにあった。
信徒B　ホンマか。
信徒A　ああ、見た。
信徒B　しゃあない。俺も行くわ。
信徒A　お前は残れ。二人して車を離れるわけにはいかん。そう言われただろう。

信徒B　とにかく押してみようや。お前ハンドルきってくれ。
信徒A　いや、まず電話だ。
信徒B　おい、…俺ら荷台に何積んでんねん。何かヤバイもんでも積まされてんのか…。
信徒A　…ヤバイって、何だよ。
信徒B　いや、…とにかく帰らんとな。
信徒A　ああ、他に帰る場所はないからな。
信徒B　おい。
信徒A　何だ。
信徒B　早よ戻れよ。

信徒A去る。信徒B鼻歌を歌い、もう一度運転席に。エンジンかからない。あきらめて降り、荷台のシートをめくる。段ボール箱の中に、薬品の瓶のようなものを見つけ、取り出してよく見てみる。突然、ラジオの音。と、荷台に立っている女。

信徒B　誰や…お前。
女　お帰り。
信徒B　何してんねん。
女　あんた、忘れてしもたんか。
信徒B　おい、ええからまずそこから降りろ。
女　ほんまに、久しぶり。（触れる）

信徒B　触るな。…ずっと俺らの後付けて来たんか、青山から。
女　青山？
信徒B　ああ。マスコミの人間やろ。どこの出版社や。
女　ちょっと、…私の顔忘れたん、声も。
信徒B　（ライトで照らす）
女　まぶしい。（霧の中に消える）
信徒B　あかん。霧や。霧がどんどん形変えるわ。これはちょっと、横になった方がえええな。（運転席へ）
女　（助手席に現れ）そうや。寝る時間も充分に取られへんかったんやろ。人間寝んとあかんわ。見えへんもんも見えるようになってくる。ゆっくりお休み。
信徒B　まずいなあ…。
女　何にもまずいことあらへん。あんたやっと帰ってきたんやから。
信徒B　…おい、まわり見てみい。
女　何やの。
信徒B　まわりは木と岩ばっかりや。空は見えへん。霧出てるからな。人の匂いのするもんなんか、ここには何もあらへん。
女　あんたこそ、よう見てみなさい。この車、あんたが大学行ってる頃から、動かへんようになって、ずっとここに置いたままになってる車やないの。
信徒B　……。
女　お帰り…。何か言うことはないの。
信徒B　うるさい。ほっといてくれ。俺は今晩中に戻らなあかんのや。
女　ただいまやろ。帰ってきた人が言うのは。

信徒B　サヨウナラ。
女　お帰り。
信徒B　あんたなあ、こうやって一生俺についてまわるつもりか。俺はもう大人なんや。そうやってつきまとうのはやめろ。
女　大人なんやったらちゃんとしいな。大学もちゃんと出て、社会に出て仕事して…。都合の悪いときだけ寝たふりしてもあかん。
信徒B　…あのなあ、オカン。
女　…やっと呼んでくれたな。
信徒B　いや、何でもない。
女　ええわ。ゆっくり時間かけよ。急には無理やな。ゆっくりしよ。
信徒B　……。
女　（『若者たち』最初のフレーズを歌う）寝た。寝ていくなあ。疲れたもんなあ。（サビを歌いながら体をポンポン叩いてやる）
信徒B　何すんねん。
女　…よう寝られるかな思て。
信徒B　何でこんなとこまでついてくんねん。
女　何でて、あんたがずーっと連絡よこさへんから。
信徒B　あかん…。
女　もう心配いらん。
信徒B　夢か。
女　そうや、悪い夢や。あんた悪い夢につかまっとったんや。
信徒B　夢とちがう。覚めなあかんのはあんたらの方や。

女　ええわ。…ほな、私ここで寝るわ。（と、車の荷台へ身を横たえる）ああ、…冷んやりする。
信徒Ｂ　あたりまえや。…山ん中ずっと走ってきたからな。
女　山ん中？　ここはガレージやろ、うちの。
信徒Ｂ　道に迷てしもたんや。…今晩中に帰らなあかんのに。
女　どこの山の中。
信徒Ｂ　さあな、それがわかったら迷わへん。
女　もうじき朝やな。空、青なってきたで。
信徒Ｂ　そんな時間ちゃう。霧が晴れてきたんや。あれは月明かりや。
女　…あの山、…何？
信徒Ｂ　…富士山や。
女　富士山…。
信徒Ｂ　ああ…。
女　…虫鳴いてる。
信徒Ｂ　ああ……。
女　寝た？
信徒Ｂ　ああ……。
女　おやすみ。

しばらくして、信徒Ａ戻ってくる。

信徒Ａ　おい、小銭もってないか。カードじゃだめだ。寝てる場合じゃないだろ。お

い。（視線を車の荷台に）…おい、起きろ。何だ…これ。誰なんだ。（女の息を確かめる）

脈を取る。瞳孔を調べる。女を降ろし、肩に担ぐ。

信徒Ａ　（Ｂに）手伝え。…掘るんだ。地獄までな。

信徒Ａスコップを手にして去る。信徒Ｂ眠ったまま。

ふいにカーラジオから音楽。『春夏秋冬』

朝、大阪近郊の一戸建て住宅。その住宅に寄り添うように併設されたガレージ。そこに置き去られた軽トラックが一台。もう使われなくなってずいぶん経つのか、フロントガラスにはホコリが積もっている。

閉ざされたシャッターが少し開き、風が吹き込むと、天窓から漏れる光にホコリが舞い上がる。作業服の男、シャッターをくぐるように、少し薄くなった頭から入ってくる。

車のドアをノックする。

追いかけるように若い男入ってくる。

日向　あ…、大将…、あの、呼んではりますけど。

仁　誰が。

日向　いや、娘さん。

仁　礼子か。
日向　いえ…。
仁　ああ。
日向　呼んできましょか。（チラと車の中をのぞく）
仁　いや、ええわ。すぐ行く言うといてくれ。
日向　ああ、…はい。（出ていく）
仁　…ほな、ヨシマサ、わし出かけるからな…。メシ、礼子に言うといたから…。もうちょっとして来うへんかったら、ここへ持ってきたれ言うて…。わし、行くからな。行ってきます。（行きかけて）…たまには中で食べたらどうや。ここは寒いやろ。…ガスヒーター買うたんや。石油は入れるのが面倒やし、電気ではぬくもらんしやな…。まあ、どっちでもええけど。…寒いのはかなわん。

女、入ってくる。

信子　お父さん、携帯。（渡す）
仁　ああ、すまん。忘れとった。
信子　ちゃんと電源入れといてよ。持ってる意味あらへん。
仁　ああ、わかってる。
信子　何、まだ寝てんの。
仁　ああ、どうや知らんけど、毛布かぶってる。
信子　ふーん。（のぞき込む）
仁　メシ、持ってきたれ。さっき礼子には言うといたんやけど。

信子　何でよ。中で食べたらええやん。
仁　ええやないか、ここで食べる言うてんのやから。
信子　聞いたん？
仁　いや、…ほな、行って来る。
信子　はい。お昼何時頃。
仁　いつもと一緒や。
信子　一緒て何時よ。
仁　十二時か、一時か二時か。
信子　わかった。
仁　…あのなあ、昼、わしここで食べるし、ヨシマサの分と弁当二つこさえとってくれ。
信子　面倒っくさい。…中で食べたらええやんか。
仁　…ほな、何か買うてくるわ。弁当屋できたんや、国道沿いに…。あんなんもたまにはええやろ。
信子　…うん。
日向　（戻ってきて）あの、…大将。…職人さん待ってはるんですけど。
仁　ああ、…今行く。（出て行きかける）
信子　ちょっと、日向くん。
日向　はい。
仁　何や。
信子　お父さん、職人さん待ってはるて。
仁　わかってる。

信子　早よ行きいな。
仁　おい、日向くん。内緒はあかんで、内緒は…。
日向　は、…何がでしょう。

仁、少し笑って去る。

信子　ほんで、いくらいるの？
日向　え、…いいんですか。
信子　いいんですかて、いるんやろ。
日向　はあ…。
信子　言うてみいな。
日向　（指を三本出す）
信子　あんた、なんぼ借りてるかわかってる？
日向　ああ、はい。
信子　普通バイトにはそんなに貸されへんねんけどなあ。
日向　はあ…。
信子　次の給料から引いとくで。
日向　えっ、全部ですか。
信子　なんぼずつやったらええの。
日向　あの、大将は知ってはるんですか。
信子　何を。
日向　いや、僕が前借りしてるの。

信子　言うてへんよ、そんなん。
日向　あ、そうですか。
信子　何、ほっとしてんのよ。
日向　いや…。
信子　帰り用意しとくから。
日向　すいません。そしたら…。（行きかける）

シャッターからスーツの男が見ていた。

日向　…どうも。
小松　あ、今からですか。
日向　ええ。
小松　がんばってください。
日向　ご苦労さんです。（去る）
小松　（入ってくる）大変ですねえ。
信子　何がですか。
小松　…いや、事務とか任されてはるんでしょ、全部。
信子　ああ。…まあ、時々は妹も手伝ってくれますし。
小松　そうですか。…今日は現場ですか、お父さんは。
信子　ええ。…あの、こんなとこでは何ですし、どうぞ中へ。
小松　いやいや、結構です。すぐ失礼しますんで。
信子　ここは寒いですから。

小松　ああ、カイロ持って来てますし。
信子　…あの、これからも毎日、…いらっしゃるんですか。
小松　いやいや、とりあえず、まあ、まだこういう時期なんで、寄せてもうてるだけの話で、毎日いうことでは…。
信子　どういう時期なんです？
小松　…まあ、お父さんには説明させてもろたんですけど、いろいろ公判が続きますでしょ、それで…。
信子　…あの、弟はもうその事とは全然…。
小松　わかります。わかりますけど、私の判断ではどうにもならんことで…。それにまだ…ねえ、姿くらませてる輩もおりまして。
信子　うちは関係ないです。
小松　いやいや何も私、長南さんとこの家がどうこう言うてるのと違うんですよ。むしろおたくは被害者なわけですし。
信子　あの…、ご近所の目もありますし、もう済んだことですから…。
小松　まあ、ねえ。…ほんでも別に制服が張り付いてるわけやないですしねえ。私もなるだけ目立たんようにはさしてもろてるわけで。
信子　仕事にも差し支えますし…、うちみたいな小さい工務店ではただでさえ仕事が減ってて、借金しようにもどこも貸してくれませんし…。
小松　あれですよ。そろそろ景気も上向きになるらしいゆうことですし、もうちょっと気ぃ楽に持ちはったら…。
信子　…そろそろ仕事なんで。（行きかける）
小松　あの、彼はいっつもこんな時間まで…。

信子　ああ、今日はたまたまです。
小松　大丈夫ですか。
信子　どういう意味ですか。
小松　いや、さっきからピクリとも動かへんから。
信子　何か、夕べは遅うまで本読んでたらしいですから。
小松　ここでですか。
信子　ええ。
小松　どんな本読んではったんですかねえ。
信子　知りません。何か一番下のから借りた本らしいですけど。
小松　ああ、真理ちゃんでしたっけ。…確かまだ大学生でしたよね。
信子　はい。
小松　いや、お父さんも大変ですわ。娘さん三人も嫁にやらなあかんやなんて。…ま　あ、三人ともべっぴんさんやから、貰い手には困らんでしょうけど。
信子　……。
小松　お姉さん、結婚のご予定とかは？
信子　そういうことも答えんとダメですか。
小松　いやいや、これはまあ、世間話の類で…。

礼子、盆に朝食をのせ運んでくる。

礼子　あ、どうも。おはようございます。
小松　あ、どうも。

信子　礼子、もうじき起きるみたいやわ。中で食べるやろから、持って入り。
礼子　うそやん。…せっかく持ってきたのに。
信子　お父さんは何もわかってへんから。
礼子　（窓に向かい）お兄ちゃん、ごはん。
小松　…おたくは、みなさんパン食ですか。
礼子　ああ、ええ。私らはそうですけど。
小松　ということは、ごはんの方もいると…。
信子　礼子。（中へ引っ込めと目配せ）
小松　いやいや単なる世間話ですわ。
礼子　…父はいっつもごはんなんです、朝は。
小松　はあ、やっぱりお父さんはねえ。そうすると大変ですねえ、毎朝両方。
礼子　いえ、私らは勝手に自分でやりますから…なあ。（と信子に）
信子　礼子、あんた洗濯は？
礼子　ああ、やるよ。
信子　昼までにやっとかんと、またお父さん帰ってきたときうるさいで。
小松　いや、感心しますわ。なにからなにまでご姉妹で分担してやってはるんですねえ。
信子・礼子　しょうがないですから。
小松　はあ、…まあねえ。えっと、礼子さん。
礼子　はい。
小松　今日は、お仕事お休みですか。
礼子　ああ、やめました。

小松　えっ、やめはったんですか、仕事。
礼子　はい。
小松　なんでまた。…いや、答えにくいことやったらいいんですけど。
信子　あの、世間話もそろそろ…。
小松　ああ、お仕事でしたね。…お姉さんはどうぞ。（礼子に）コーヒー冷めませんかね。

ヨシマサ車より出る。

ヨシマサ　俺、朝メシいらんわ。食うのやめとく。
礼子　ああ、おはようお兄ちゃん。
信子　（ヨシマサに）あんた、誰にえらそうに言うてんのよ。
小松　おはよう。よう寝てたなあ、キミ。もう起きひんか思たで。
ヨシマサ　全然寝とらへんわ、ボケ。
小松　うわ、何か怒ってはるわ、この人。
ヨシマサ　（小松に）あんた、欲しかったら食うてええで、俺は食わん。
礼子　せっかく持ってきたのに。
信子　何をえらそうに…。いつも人の倍は食べるくせに。
小松　あ、やっぱりそうなんですか。
ヨシマサ　何やねん、やっぱりて…。
小松　いや、写真と顔がちがうから、太って…。
ヨシマサ　写真。どの写真や、見せてみろや。

信子　うるさいな。朝から大きい声出しな。
ヨシマサ　こいつ入れたん誰や。
小松　いや、私が勝手に入って来ただけで、お姉さんは。
ヨシマサ　出ていけ。お前、公安いうたら陰に隠れてコソコソすんのが仕事やろ。俺の前に顔見せてどないすんねん。
小松　…まあまあ。お腹減ってると、気ぃも立つから…。食べたほうがええんとちゃうか。
ヨシマサ　お前に言われたないわ、うちのメシじゃ。
小松　（礼子に）あの、私いただいてもいいですか。どうも空きっ腹やと私もどなりかえしてしまいそうで…。
礼子　お兄ちゃん、いらんの？
ヨシマサ　いらん。
礼子　どうぞ。
小松　いただきます。…（食べて）あ、私トーストはカリカリが好きなんですけど、この焼き方は合いますわ。結構カリカリしてて…。
礼子　あ、それ焼き過ぎです。
信子　あんた、お風呂は？　シャワーやったらすぐ浴びれるで。
ヨシマサ　ほっといてくれ。
信子　ああ、そう。

真理、出かける支度をして入ってくる。

真理　お兄ちゃん、本。
ヨシマサ　ああ。（探しながら）何や、今日はもう出んのか。
真理　うん。全部読んだ？
ヨシマサ　ああ、２回読んで、３回目の途中や。
真理　ふーん。ほなええわ、貸しとく。人の本やから汚さんといてな。
ヨシマサ　ああ、わかった。
小松　真理ちゃん、それ何の本？
真理　お兄ちゃん、聞いてはるで。
ヨシマサ　…。“公安警察の犯罪と陰謀”。
小松　ほう、そんな本が出てますか。
真理　何言うてんのよ。『ハムレット』やんか、シェイクスピアの。
小松　ああ、小説ですか…。
真理　小説やて。
ヨシマサ　真理、こいつとしゃべんな、アホがうつる。
真理　お兄ちゃん、言い過ぎ言い過ぎ。
礼子　『ハムレット』は戯曲です。
小松　ああ、…そうそう。台本でしたね。生きるとか死ぬとかいうセリフで有名な。
…おもしろいですか。
真理　それ私に聞いてる？
小松　…ああ、みなさんに。
真理　お姉ちゃん読んだことある？
礼子　私？　いや、あらすじぐらいは知ってるけど…。

真理　そやんなあ。普通読まへんよなあ、こんなややこしい本。…やっぱりやめとこ。
　行ってきます。
信子　行ってらっしゃい。早よ帰りや、
真理　多分遅なると思う。（出ていく）
小松　何か、ナゾを残して去りましたね…あの子。
信子　はあ？
小松　いや、その本やめとこって…。
礼子　ああ、あの子演劇に凝ってるんです。
小松　ああ…。学生演劇とか、そういうのですか。
礼子　ええ。
小松　へえ。今はああいう子が演劇やるんですねえ。…私らの頃には何かちょっと難しい奴がやってたように思うんですけど。
信子　さあ、これもう下げていいですか。
小松　ああ、どうもごちそうさんです。
信子　私、行きますけど。
小松　…どうぞ。すいません、お引き留めしたみたいで。
信子　ここ、閉めますんで。
小松　…そうですか。えっと、じゃあ…。ほな、キミ、また来るんで。
ヨシマサ　来んでええ。
小松　がんばってな。
ヨシマサ　何を？
信子　礼子、あんたはまだいてるんか。

礼子　すぐ行くわ。こっちから出るし。（と、奥のドアを指す）
信子　（シャッターを降ろしかける）
小松　あ、ちょっと。（中へ戻って）キミなあ、こんなとこでは息も詰まるやろ。外へ出た方がええんとちゃうか。
ヨシマサ　その手に乗るかい。
信子　閉めますんで。
小松　はいはい。（礼子に）パンとコーヒー、おいしかったです。（去る）

シャッター閉まる。天窓から淡い光。

礼子　お兄ちゃん、後で何か食べる物、持ってきたげよか。
ヨシマサ　（本を開いていて）ああ、この汚らわしい体、どろどろに溶けて露になってしまえばよいのに。せめて自殺を大罪とする神の掟さえなければ…。
礼子　おもしろい？　ハムレット。
ヨシマサ　ああ、どうしたらいいのだ。この世の営みいっさいがつくづくいやになった。わずらわしい、味気ない、すべてがかいなしだ！　ええい、どうともなれ。庭は荒れ放題、はびこる雑草が実を結び、あたり一面、むかつくような悪臭。このようなことになろうとは。たった二月、いや、まだ二月にもならぬ。
礼子　何か食べたい物あったら言うてよ。持ってくるし。
ヨシマサ　気ぃ使い過ぎや、…お前ら。
礼子　うん。…わかった。
ヨシマサ　仕事、ほんまにやめたんか。

礼子　うん。
ヨシマサ　何で俺に言わへんかったんや。
礼子　お父さんが言うなって。
ヨシマサ　俺のせいか。
礼子　そんなんとちがうよ。…やめん方が良かったと思う？
ヨシマサ　いや。
礼子　何かやめてほっとした。ずーっと何かちがうなって思ってたから、毎日毎日…。
ヨシマサ　ああ…。
礼子　お兄ちゃんのこと、私はわかる気がする。
ヨシマサ　…お前おやじになんか言われてんのか。
礼子　何かて？
ヨシマサ　俺のこと、わかったふりせいとか何とか。
礼子　…どういう意味。
ヨシマサ　すまん、悪かった。
礼子　お兄ちゃん、私の部屋で寝起きしていいよ。
ヨシマサ　お前はどうするねん。
礼子　一緒でええやんか。小学校のときみたいに六畳間で二人。
ヨシマサ　…ああ。
礼子　どうする。
ヨシマサ　ええねん、俺は車の中で。
礼子　（車のドアを開け）いっぺん毛布干そか。後で新しいの持ってくる。
ヨシマサ　いらん気ぃ使うな。置いとけ。

礼子　（ヨシマサに毛布をかぶせる）
ヨシマサ　（そのままで）何すんねん。
礼子　（毛布に入って）ええやん。私の部屋で…。
ヨシマサ　…お前、男いてたやろ。
礼子　いつのこと言うてんの。…五年も出ていったまんまで。
ヨシマサ　（毛布を取り、本を礼子に）８７ページ。
礼子　え？
ヨシマサ　ページの角のとこ、折ってあるやろ。（礼子が開くのに合わせて）…尼寺へ行け。なぜ、男に連れそうて罪ぶかい人間どもを生みたがるのだ。このハムレットという男は、これで自分ではけっこう誠実な人間のつもりでいるが、それでも母が生んでくれねば良かったと思うほど、いろんな欠点を数えたてることができる。うぬぼれが強い、執念ぶかい。野心満々だ。そのほかどんな罪をも犯しかねぬ。どうしても結婚したいというのなら阿呆を婿にするがいい。すこし利口なやつなら世の亭主なるものにはなりたがるまい。さ、行け、尼寺へ。
礼子　（読んで）あの方をお救い下さいますように。
ヨシマサ　…俺は気違いか。
礼子　誰もそんなこと思てへんよ。（行きかけて）
ヨシマサ　おい、本。
礼子　（渡して）来週お母さんの納骨やけど、行く？
ヨシマサ　いや、やめとく。
礼子　お父さんに聞いとくように言われたんやけど、そう伝えとくわ。（去る）
ヨシマサ　（つぶやくように）生か死か、それが疑問だ。どちらが男らしい生き方か。

じっと身を伏せ、不法な運命の矢弾を堪え忍ぶのと、それとも剣をもって押し寄せる苦難に立ち向かい、とどめを刺すまであとには引かぬのと、一体どちらが。いっそ死んでしまったほうが。死は眠りに過ぎぬ。…それだけのことではないか。眠りに落ちればその瞬間、一切が消えてなくなる。胸を痛める憂いも、肉体につきまとう数々の苦しみも。願ってもない幸いというもの。死んで眠って、ただそれだけなら。

信徒Ａ　忘れたのか、死は眠りじゃない。

見れば、車のバックミラーに向かい、化粧をしている男。

ヨシマサ　おい、夜まで出てくるな言うたやろ。
信徒Ａ＝兼光　裏切った奴には地獄で永遠の苦しみが待っている。
ヨシマサ　ええから隠れとけ。誰が入ってくるかわからへんやろ。
兼光　こんな真夜中にか。
ヨシマサ　お前おかしなったんか。まだ朝や、外は明るいやろ。
兼光　ああ、外はまるで昼間みたいな明るさだ。満月に照らし出されてな。
ヨシマサ　…おい、兼光。
兼光　（顔を見せて）どうだ？
ヨシマサ　何が。
兼光　私、きれい？
ヨシマサ　…お前、その服どうしたんや。
兼光　ああ、手近なのを失敬してきた。ついでに化粧道具もな。

ヨシマサ　今か。
兼光　ああ。家中寝静まって静かなもんだ。
ヨシマサ　それ、おふくろのやないか。
兼光　口紅の色が気にいらん。（新しいのを出して）こっちのほうがいいか？
ヨシマサ　（取り上げて）どないしたんや、この程度閉じこもっただけで。俺らもっとしんどい事してきたやないか。それに比べたらここは天国や。
兼光　長い間世話になった。俺は今晩出ていくぞ。
ヨシマサ　どこにいくつもりや。
兼光　わからん。どこかだ。とにかくここからは遠いところだ。
ヨシマサ　どうせ国内やろ。パスポートも金もないし。
兼光　こっちの支部に行けば何とかしてくれるかもしれん。
ヨシマサ　アホ。警察張り付いとるわ。
兼光　いや、この格好なら大丈夫だ。
ヨシマサ　ドアホ。余計目立つわ。
兼光　じゃあどうしろって言うんだ。
ヨシマサ　ここにおれ。悪いことは言わん。
兼光　お前のそばにはいたくないんだ。揺れてる奴のそばにはな。
ヨシマサ　ふざけんな。お前はどうなんや。
兼光　何が。
ヨシマサ　お前はまだ信じてんのか。
兼光　俺のことはどうでもいい。お前はどうなんだ。
ヨシマサ　…ええから、それ脱げ。

兼光　（女っぽく）何しようっていうの。
ヨシマサ　アホ。どこ行くにしても目立つやろ言うてんねん。元の服に着替えろや。
兼光　引き留めないのか。
ヨシマサ　…戻りたいのやったら戻ったらええやろ。お前の名前も顔も新聞に出てへん。お前は手配されてへんのや。
兼光　本当にそう思ってるのか。
ヨシマサ　ちがうんか。
兼光　マスコミに踊らされるな。奴らの作戦だ。

霧の中で会った女、立っている。

女＝智子　オカエリ…。
ヨシマサ　え？
智子　お帰りなさい。
ヨシマサ　おかん…。
兼光　あ、どうもはじめまして。お母さんですか…。
ヨシマサ　ちゃうねん。おかん死んでんねん。
兼光　（小声で）知ってるよ。まだこっちにとどまってるんだ、きっと。おい、何とかごまかせ。
ヨシマサ　何を…。
兼光　俺のこと知れちゃまずいだろ。
智子　…もう十二時回ってるで。遅かったなあ、ヨシマサ。

ヨシマサ　…あんた、何してるねん、こんなとこで。
智子　何や、飲んできたんか。程々にしとかんと車は危ないで。…こんばんは。そちらはお友だち？
兼光　はい、ヨシマサくんの大学の友人で…。
ヨシマサ　ああ、カネミツ。
智子　そう、カネミツさん。
兼光　カネ…ミツコです。
智子　そう…。大学では何勉強してはるの。
兼光　ああ…、医学です。
智子　えらいねえ。女医さんにならはるんや。
兼光　いえ、別にえらくはないです。
智子　ヨシマサ、家へ入ってもらったら？　すいません、散らかしてますけど。
兼光　いえ、すぐ失礼しますんで…。
智子　すぐって、こんな時間やのに。
兼光　ああ、家がすぐ近所なんで。
智子　そんな気ぃ使わんでも、家は全然かまへんから。…なあ。
ヨシマサ　おかん…、まだ朝やろ。
智子　そらそうや。もうちょっとしたら朝やわ。ええなあ、大学生は気ぃ楽で。明日もまた昼まで寝てるんか。
ヨシマサ　あの…、俺、大学やめたんや。
智子　やめる？　何言うてんのこの子は。
ヨシマサ　あした…、家出ていく。

智子　…あんた夜中に帰ってきた思たら、何言い出すんや。
兼光　お前、何言ってるんだ。
智子　…ちょっと、あのホンマなんですか。
ヨシマサ　おかん、俺、家継ぐとかそういうことに何の意味も感じへんねん。
智子　お父さんにどうやって言うの。ぎょうさんお金かかってんのやで。
ヨシマサ　金の話はええねん。そういうことに意味はないねん。もうじき全部終わってしまうんや。今のうちに準備しとかんと、後からでは取り返しがつかへんのや。
間に合わへんのや。
智子　えっと、この子何言うてるんでしょう。
ヨシマサ　俺、自分のことは自分でやるから。大学でやってきた建築の知識もちゃんと活かせんねん。俺、必要とされてんねん。
智子　誰に？
ヨシマサ　…とにかく、その人は全部知ってはるんや。人が何で生まれてきたか、死んでどうなるか。どうやって生まれ変わるか。これからの世界がどうなっていくか。
兼光　おい、もういい。お前が揺れてないのはわかった。
智子　すいません。せっかく来てもうたのに。
兼光　いえ、ヨシマサくんの言ってることは正しいです。原則として。
智子　…なあ、あんた。人様に迷惑がかかるようなことだけはやめてな。
ヨシマサ　…おかん、あんた死んだんやで。
智子　何言うてんの、この子は。
ヨシマサ　来週、お骨納めや。
智子　あんたの言うてることはちょっともわからんわ。何で私が死ななあかんの。人

のこと勝手に殺さんといて。
ヨシマサ　俺ら二人が霧の中で迷てた晩、あんた俺んとこ来たやないか、山ん中へ。
あんた、あの晩病院で…。
智子　あの、ちょっとこの子に代わって説明してもらえません？　何でこの子、私の
こと死ぬ死ぬ言うんか。
兼光　えっと、それは心理学的にですか、医学的にですか。
智子　どっちでも結構です。わかるように説明して下さい。（ヨシマサに）あんた、お
医者さんになる人の言うことやで。よう聞いとき。
兼光　あの、…極論で恐縮ですが、死に対して医学で説明できることはたかが知れて
るんです。いわば人が死んでいくプロセスを説明できるに過ぎない。血圧が下がり、
やがて心臓が停止し、血液が酸素を脳に運ばなくなり、無限の闇が訪れる。あるい
は、脳の機能が停止しても呼吸が続いている場合、医学的にそれは死と言えるのか
どうか、脳死はつまるところ倫理の問題で…。死について我々が知っていることは、
あまりに少なすぎるんです。医学者の立場なら…。
ヨシマサ　そやから凡人は死んだら何もなくなると考えるんや。でも俺らにはあんた
が見えてる。今までやってきたことの成果が出てるんや。
智子　すいません。帰って下さい。
兼光　いい形で転生されることをお祈りします。
ヨシマサ　おい、ここに居とけ。
兼光　あ、これ（服のこと）お借りしていきます。どうも夜分におじゃましました。
ヨシマサ　ホンマに行く気か。
兼光　ああ、今出れば始発にじゅうぶん間に合う。

ヨシマサ　とにかくその格好はやめろ。
兼光　うるさい。ほっとけ。
　　ヨシマサ、上着をはがそうとして突き飛ばされる。
兼光　あ、本当はこんな乱暴な女じゃないんです。ただちょっとセッパつまってるもんで。…今度は手土産もっておじゃまします。（去る）
　　ヨシマサ、倒れた目線で車の下に何か見つける。
ヨシマサ　おい、…行くな兼光。盗聴器仕掛けられてる。全部聞かれてるぞ。おい、兼光。（出ていく）
　　と、扉が開き父、仁が現れる。パジャマ姿。
智子　あ、お父さん。今、ヨシマサが帰ってきてな…、家出ていくとか急に言いだして。
仁　おい、ヨシマサ…。誰か来てんのか。何や話し声聞こえたんやけど…。
智子　お父さん…。
仁　どこ言ってしもたんや。こんな真夜中に…。
智子　今なあ、お友だちが来てはって…その人追いかけて…。
仁　どうせ今日は日曜や。…待っとくか。仕事ないし。…心配や。…またおかしな奴

らが連れ戻しに来とったらかなわん。
智子　連れ戻すて…誰が。
仁　智子が来とったんやろか。
智子　はい。
仁　まだ家ん中、ウロウロしとんのかなあ。
智子　私、ここにいてるよ。
仁　おい、ヨシマサちゃんと戻ってきてるで。…心配せんと成仏せえよ。
智子　お父さん…、私。
仁　…五十越えて、もうちょっとしたら後継がせて、十年仕込んだら楽隠居やと思とったのに…。あんまりええ夢見過ぎてバチあたったかなあ…。こんなことやったら娘四人の方が良かった…。
智子　何言うてんの、ヨシマサはしっかりした子や。
仁　育て方間違うたか…。
智子　私、ちょっと駅の方見てくる。
仁　…まあ、今からでもええ。しっかり見ててやらんと…。（バックミラーに自分の顔を写す。ふいに智子が写った気がする）…智子。いてんのやったら返事してみい。
智子　はい。
仁　わし、お前の分も長生きするからな。
智子　私、死んだんや…。
仁　旅行みたいなもん、年寄ってからでええ思てどっこも連れてやらなんだが…。人いうのはわからん。
智子　お父さん…。私、ガンやったんやなあ。

仁　こんな寒いとこで、あいつ毎晩何考えとんのやろ…。
智子　…言うてくれてもよかったのに…。そのほうがいろいろ準備もできたのに…。
仁　月曜日は裁判所に行かんならん。…まあ、今日一日はゆっくりしよ。…しかし、あの弁護士難儀やで。…医者も弁護士もえらい人ばっかりや思てたけど、あかん奴はあかん。…痛い痛い言うてんのになんべん手術さしたら気ぃ済むんや。…医者変えたったらよかったなあ…。
智子　…何か羽織るもん取ってくるわ。あんた寝込んでしもたらえらいこっちゃ。
仁　酒でも飲んだろか。
智子　あかんて。お酒はお医者さんに止められとったやろ。
仁　あいつが二十歳の正月か…。ぎょうさん飲ましたって…。あいつ礼子のひざで寝てしまいよった。…いつまでたっても世話のやける奴や。

次第に朝の光。
真理やってくる。シャッターの外に二人の女。

真理　何してんの、お父さん。
智子　真理。
仁　何やお前、こんな時間に帰ってきて。
真理　（母と目が合うが）何言うてんの。夕べは早よ帰ってきたやんか。…お兄ちゃんいてる。
仁　いや、帰ってこんのや。
智子　あんたは元気か。

真理　ふーん。（母に）ええことやん、外に出んのは。
智子　そうやな。（扉に消える）
真理　（外の二人に）ちょっと、入り入り！
別所　あ、どうも。こんにちは。
園部　こんにちは。すいません、おくつろぎのところ、おじゃましまして。
真理　お父さん、ユキちゃんとカオリちゃん。ごめんな。お父さん日曜はいっつもパジャマやねん。
仁　ああ、…どうも。真理、もう昼か。
真理　うん。お昼は信子姉ちゃんに頼んでるし。
別所　お世話になります。
園部　ご迷惑をおかけします。
仁　ああ、…いえいえ。
真理　どうしたん、お父さん。
仁　いや。…ちょっと寝てくる。
真理　何。どっか具合悪いの。
仁　…夕べからずっとここにおったみたいや。
真理　何で？
仁　わからん。
真理　ふーん。おやすみ。
仁　おやすみ。そしたら失礼します。まあ、ゆっくりしてって下さい。（去る）
園部　（その背中に）あ、ありがとうございます。
別所　すいません。…何、お父さんいっつもあんなん？

真理　いや、ちょっとボケてはるわ、今日は。
園部　いい感じじゃない、お父さん。
真理　ウソー、よう言うわ。どこが？
別所　カオリちゃん、中年趣味？
園部　…（考えて）別にそういうわけじゃないけど。
真理　カオリちゃん、流す流す。
園部　あ、ごめん。
真理　そうや、ホン…ホン。（車のシートを探す）あった。ごめんな、長いこと借りてて。
園部　あ、いえいえ。（ページの折り目を見つけ）あっ。（必死で伸ばす）
真理　どうしたん。
別所　いや、折ってあるわページの角んとこ。
真理　ごめんな、傷ついた？　お兄ちゃんにより言うとくわ。絶対汚すなって言うたのに。
園部　ううん。いい。…ハムレットのいいセリフのとこばっかりだし、よく読んでくれたんだと思う。かえってうれしいくらい。…ハハハ。
真理　無理してんな、それ。
別所　別にカオリちゃんが書いたんとちゃうやろ、ハムレット。
園部　ああ、でも…。
真理　ああ、何かな。二回くらい読んだ言うてたで、お兄ちゃん。
園部　へえ、すごい。お兄さんてどんな人？
真理　ああ、別に普通やで。あんまり出歩かへん人やし、もうじき帰ってくる思うけ

ど。
別所　なあ、お兄さんて、あの…帰って来はった人やろ。
真理　うん。
別所　こんなん言うてあれやけど、私ちょっとドキドキしてんねん。
真理　何でよ。
別所　だって帰って来はってここで寝起きしてはんのやろ。車の中で。何かええやん、そういうの。スリルがあって。
真理　そうか？　あんまり期待しすぎるとガッカリすんで。
園部　あの、お兄さん怒らない？
真理　え、何が？
園部　私たちがここ、練習で借りるって言ったら…。
真理　ああ大丈夫大丈夫。私から言うし。お兄ちゃん私には甘いから。
園部　ああ、うん。
真理　そろそろお兄ちゃんも家入らなあかんねん。変に意固地にならんと。
別所　何、やっぱり家の権利書の話？
真理　え、ウソ。私そんなことまで言うた？
別所　うん。こないだの飲み会の時。
真理　ウソー。
園部　言ってたよ。二年ぐらい前に一度戻って来たと思ったら権利書持って出ていって…、それから裁判になってるって。
真理　いや、説明してくれんでも、それは知ってるて。
別所　大丈夫なん？　家出ていかなあかんとかそんなんは。

真理　ああ、もう全然大丈夫。
別所　何で。
真理　知らんけど大丈夫やってお父さんが言うてたもん。
園部　たぶん登記の書き換えの手続きはまだされてなかったんじゃないかな。逆に真理んちが訴えてるとか。
真理　そうなん？
園部　いや、私は知らないけど。
別所　カオリちゃんて何でもよう知ってんな。感心するわ。
園部　いや…。私まだまだ知らないことの方が多いと思う。世の中ってそんなに簡単じゃない。
真理　カオリちゃん、流す流す。
園部　あ、ごめん。でも、ホントにそう思うから、私。
真理　うん。ほんでさあ、ハムレットでいく、どうする？
別所　あ、真理が流してる。
真理　あんた、戻しなや話を。
園部　あの、私思うんだけど…。
真理　はい。
園部　やっぱり男の人が中心にならないとダメだし…。
別所　あ、ハムレットの話？
園部　うん。…いろいろ声はかけてるんだけど男の子ってあんまりこういう作品に興味ないみたいだし。
真理　そうやんなあ。

園部　それに私の演出力じゃあ、どの程度の完成度になるか疑問だし。
別所　えっ、カオリちゃん演出すんの？
園部　えっ…。いや、私がやった場合の話。
真理　ええやん、カオリちゃんで。私らの知らんことようけ知ってはるし。
園部　ありがとう、真理。
別所　ちょっと、そんなん私らだけで決めたら後でもめるんとちがう？
真理　何で、ええやん。私らが一番やる気になってるねんし。私らが引っ張っていかんと。
園部　あの、それで…。（本を出す）これ、持ってきたんだけど。
別所　何それ。
園部　ハムレットがダメな場合にと思って…。
真理　カオリちゃん、あんたムッチャ手回し早いなあ。
別所　（手にとって）うわっ、チェーホフやん。
真理　誰それ。
園部　ロシアの劇作家で、『桜の園』とか『かもめ』とか書いた人なんだけど…。
別所　で、カオリちゃんのおすすめはどれなん？
園部　一応、『三人姉妹』かなって思うんだけど。
真理　あ、ええやんそれ。グッドやん。
別所　あんた読んだことあんのか。
真理　知ってるよ。三人の姉妹が出てくる話やろ。ええやんちょうど三人で。
別所　あんたなあ、三人姉妹言うたかて三人姉妹が出てくるだけちゃうねんで。三匹の子ぶたでもオオカミ出てくるやろ。

真理　ええやん。オオカミは男の子にやらしたら。
園部　あの。…オオカミは出てこないんだけど。
真理　わかってるて。
園部　あ、ごめん。
別所　カオリちゃん、あんたの出してくるものってさあ、何か大作が多くない？
園部　そうかなあ。でも私が書いても多分そんな感じになると思うんだけど…。
真理　えっ、カオリちゃんが書く？
別所　あんた、そんな野望も持ってたん？

日向入ってくる。普段着で。

日向　あの…。
園部　あっ、おじゃましてます。
日向　あっ、どうも。
別所　（真理に）お兄さん？
真理　違う違う、ヒナリンや。
別所　ヒナリン？
真理　どうしたん、ヒナリン。今日は休みと違うん？
日向　あ、そうなんですけど…、大将は？
真理　あ、何か寝るとか言うてたけど。
日向　そうですか。…じゃあまた。
真理　ちょっと何よ。せっかく来たのに。急ぎやったら起こすで。

日向　いや…いいです。明日で。
真理　お姉ちゃんやったらいてるけど。
日向　ああ…いいです。
真理　何よ。…言いや、気になるやん。
日向　ああ…、そしたら。あの、来週から5時上がりにさしてもらいたいんですけど、言うといてもらえますか。
真理　うん、ええけど。あかん言われたらどうすんの。
日向　また、電話します。今晩でも。
真理　そう…。

ヨシマサ入ってくる。

日向　ああ、どうも。
真理　ああ、お兄ちゃんどこ行ってたん？　買い物？
ヨシマサ　（シートに座る）
園部　あの、おじゃましてます。
別所　…（真理に）怒ってはる？
真理　お兄ちゃん、ユキちゃんとカオリちゃん。
ヨシマサ　名字は？
園部　あ、園部カオリです。すいません留守中に勝手に。
別所　ごめんなさい。別所ユキです。真理ちゃんと大学で演劇サークルやってる。
ヨシマサ　あ、ハムレットの人？

別所　いえ、それはこの人です。カオリちゃん。
ヨシマサ　あ、今返すわ、別所さん。
別所　いえ別所は私です。
ヨシマサ　ああ、園部さんか。
真理　お兄ちゃん勝手にページの角んとこ折ったやろ。カオリちゃんそんなんムッチャ気にすんねんで。
園部　真理、いい。気にしてないから。
ヨシマサ　ああ、もう返したんか。
真理　ちょっと謝りいやお兄ちゃん。
日向　あの、そしたらよろしく。（行きかける）
ヨシマサ　おい。…毎日うちで仕事して楽しいか。
日向　あ、いえ、まあ…。何でですか？
ヨシマサ　日曜まで来てるからや。アホちゃうか。
日向　…ちょっと、大将に用事があって…。
真理　お兄ちゃん。
日向　…そしたら、失礼します。（去る）
別所　どうも。
園部　さよなら。
ヨシマサ　はっきりせん奴や。
園部　あの…、お兄さん良くないと思います。今の態度。
ヨシマサ　えっ？
園部　あの人傷ついてました。

ヨシマサ　ああ、ごめんごめん。
園部　私に謝っても仕方ありません。
別所　ちょっと、何言うてんのよ、あんた。
ヨシマサ　真理、この人変やで。
真理　お兄ちゃん、ちゃんと謝りいや、ハムレットの本のこと。
ヨシマサ　ああ、それで怒ってはんのか。
園部　違います。
ヨシマサ　それは悪かった、ごめんごめん。
園部　…ハムレットお読みになられてどうでした？
ヨシマサ　何て？
園部　いや…感想。ハムレットのセリフのところ折ってらっしゃったから。
ヨシマサ　ああ、おもしろかったで。絶望的に。
園部　そうですか。
真理　話終わるやんか、そんな真面目な質問。
園部　ああ、ごめん。
別所　（取り繕って）お兄さんとかさ、ハムレットやったらおもしろいんとちがう？
真理　ええ、こんなずんぐりむっくりやのに。
園部　いや、五幕二場にあるんだよ。ガートルードのセリフに「あの子は汗かきで、すぐ息切れがするたちだから」っていうのが。
真理　えっ、どういうこと？
園部　つまりハムレットっていうのは、ある解釈によると、汗かきで太り気味だったっていう…。

真理　え、ホンマにおったん、ハムレット。
園部　いや、そうじゃなくて。
別所　ふーん。私、ハムレットて田村正和みたいな感じやと思ってたわ。
ヨシマサ　ほな俺違うやないか。
真理　（笑って）ホンマやわ。
ヨシマサ　おい、ここに何か用あるんか。
真理　あ、そうや。お兄ちゃん待ってたんや私ら。
ヨシマサ　何で。
真理　あのなあ、ここ貸してほしいんやんか。稽古すんのに。
ヨシマサ　ハムレットのか。
真理　ううん。ハムレットはやめて三人姉妹。
別所　え、それ決まったん？
真理　あれ、カオリちゃんが書くんやったっけ。
園部　そういうことなら私がんばってみる。
ヨシマサ　お前ら学校の教室でやったらええやろ、そんなもん。
真理　あかんねん。私らみたいなサークルは、学校に届けだしてないから。
ヨシマサ　俺に出て行けてか。
真理　家入ったらええやんか。別にこんなとこおらんでも…。
別所　あの、無理やったらいいんです。どっか探しますから。
園部　お兄さん、ハムレット的な二者択一じゃないと思うんです。
ヨシマサ　真理、何か言うたはるでこの人。
園部　家の中で暮らすか、出ていくかっていう選択じゃなくて…、家族っていうのは

もっとゆるやかに連帯するようなものじゃないかって。
ヨシマサ　俺、学生さんに説教されてんのか。
別所　あ、すいません。私ら親のスネかじりの分際で。
真理　大丈夫大丈夫。お兄ちゃんもスネかじりやから。
園部　あの、これ良かったらお貸しします。三人姉妹。
ヨシマサ　何で。
園部　何かあると思うんです。読んでみていただければ。
ヨシマサ　ケッ、演劇で世の中変えるつもりか。ええなあ、学生さんは先に希望があって。
園部　あの、宗教ならそれが可能ですか。
別所　カオリちゃん。
ヨシマサ　おもしろいなあ、あんた。
園部　お兄さんは何になりたい人ですか。
ヨシマサ　あんたは。
園部　わかりません。ただこのままでいいとは思いません。
ヨシマサ　ほうれ見い。結局わかれへんねん。これ返しとくわ。またページの角んとこ折ったら気ぃ悪いやろ。
園部　なあ、爺さん。人生というやつは妙にぐるぐる変わるもんだなあ。人をだましてばかりいるもんだなあ。きょう僕は退屈で、所在のないままに、ほらこの本を引っぱり出してみたんだ。…いやはや僕は市会のお雇い書記にすぎん。そこで、お雇い書記たるこの僕が抱きうる最大の希望といえば、つまり市会の議員になることさね。僕がここの市会の議員になるなんて！　やがてモスクワの大学教授、ロシアが

誇りとする有名な学者、それを夢見ているこの僕がね！
ヨシマサ　おい、勝手に稽古始めんなや。
園部　：第二幕、アンドレイのセリフです。『三人姉妹』には男の兄弟がいるんです。
　市議会に出ているアンドレイは自分の人生を嘆いてばかりいるんです。
ヨシマサ　それが俺やて言いたいんか。
園部　いえ、アンドレイは私かも知れません。私が言いたいのは、少なくとも信念がなくてはいけないということです。
ヨシマサ　何？
園部　何のために子どもは生まれるのか。どうして星は空にあるのか。何のために生きるのか。それを知ること。さもないと何もかもくだらない根無し草になってしまう。
ヨシマサ　おい、なんとかしてくれ。
真理　カオリちゃん、何か熱いで。あんた熱でもあるんか。
園部　いや、今のはマーシャの二幕のセリフの引用なんだけど。
別所　あんたさあ、自治会の選挙に出たら、きっといけるわ。
園部　どうして。
別所　自治会長になったら、私ら予算とれるやん。そしたらお兄さんに迷惑かけんでも済むし。
園部　ああ、そういう意味か。
信子　（入ってきて）真理、用意できたけど、どうする。
真理　ああ、今行く。カオリちゃんユキちゃん、食べよ食べよ。お姉ちゃんお昼何？
信子　ああ、お好み焼き。焼くのぐらい自分らでしいや。

真理　うん、わかった。カオリちゃんお好み焼きやって、いける？
園部　ああ、大丈夫。
真理　（姉に）カオリちゃんな、タコヤキあかんねん、タコ嫌いやから。
園部　あ、でもお好み焼きは大好きです。私実家がこっちじゃないから知らなかったんですけど、やっぱり本場のはおいしいですね。
信子　うちのはどうか知らんけど、まあ食べてみて。
園部　あ、はい。ありがとうございます。
別所　（インスタントカメラを出して）なあ真理、こないだの飲み会の時のん、フィルム余ってんねんけど、みんなで撮らへん。お兄さんもお姉さんも入ってもらって。
真理　ああ、ええで。ほなみんな車の前に集まって。
ヨシマサ　俺ええわ。どっかお前ら外で撮ってくれや。
信子　ほな、あんたが撮ったりいや。えらそうに。
ヨシマサ　（別所に近づき）俺やるわ。
別所　あ、いいんですか。すいません。

さっきから小松のぞいていた。

小松　あ、私撮りましょか。
信子　ああ、どうも。
小松　（ヨシマサに）代わるわ。（カメラを構えて）はい、撮りまーす。いちたすいち
　は…、あれ。
別所　あ、巻いて下さい、それ。

信子　（ヨシマサに）あんたいつ帰ってきたん。
ヨシマサ　ついさっきや。
信子　お父さん心配してたで。…ごはんは？　ここでは焼かれへんで。
ヨシマサ　いらん。
小松　ああ、さっきヨシマサくん、駅前で食べましたんで。私と三人で。私のおごりで。…（外に）おい、君も写真入ったらどうや。
兼光　…どうも。（鳥カゴを抱え入ってくる）
小松　紹介しますわ。私の友人で兼光くん。
信子　ああ、同僚の方ですか。
兼光　いえ。
小松　はい、ニッコリ笑って…。（フラッシュ）
別所　すいません、ありがとうございました。
信子　（小松に）…今日は日曜ですよ。
小松　いや、休みなしですわ、私らみたいな仕事は。
真理　ほな行こか。お姉ちゃん、台所？
信子　そうや、ホットプレートいっぺん洗てから使いや。
真理　わかった。（ヨシマサに）お兄ちゃん、考えといて、稽古場のこと。別に今すぐ言うわけやないから。
ヨシマサ　いつあんねん、それ。
真理　ああ、今年の秋や、学園祭。まだ先の話やから。
園部　あの、すいません。変なこと言ってしまって。
ヨシマサ　メシ冷めるで。

園部　いえ、今から焼くんです、お好み焼き。
別所　カオリちゃん、行こ。
真理　お姉ちゃん、先食べんで。（三人去る）
信子　はい。（小松に）あの、お支払いしますわ、弟の食事代。
小松　ああ、結構です。気にせんといて下さい。
信子　いえ、言うて下さい。なんぼですか。
兼光　千とんで三十円ですよ。ヒレカツ定食一人前。
小松　…ま、その程度ですから、昨日の朝食のお礼ですわ。
園部　（戻ってくる）あの。
ヨシマサ　何や。
園部　私のお父さんの会社の部下の友だちのお父さんが、カスミガセキの地下鉄で亡くなりました。どう思われますか。
ヨシマサ　要するに他人やな。
園部　（本を差し出して）どうぞ。ページの角んとこ折っておきましたから。（手渡して）失礼しました。（去る）
信子　…あの、（兼光を見て）あんまり人増やされると困るんです。それに、あれ何なんです？
小松　ああ、鳥カゴですか。私がプレゼントしたんです。彼が欲しがるから。
信子　（行きかける）
ヨシマサ　おい。
信子　何？
ヨシマサ　これ、さっきの奴に返しといてくれへんか。

信子　（受け取る。ため息ついて去る）
ヨシマサ　何しに戻ってきたんや。
小松　いや、兼光くんが一人では向こうに戻られへん言うからな。
ヨシマサ　おい、兼光。ほんまにお前こいつの言うことに乗せられたんか。
兼光　…見えるか、カゴの中のカナリヤが。
ヨシマサ　カナリヤ？
兼光　ああ、腹を減らして死にかけてる。たとえカゴから出してやっても、もう生きる術はないだろう。こいつは生まれたときからカゴの中で暮らしてきて、エサの捕り方を知らないんだ。
ヨシマサ　何が言いたいねん。
小松　まあ、もうエサは捕れんと、そう判断したわけや、兼光くんは。
兼光　お前も戻らんか？　同じカゴの中でも確かに俺たちは飛べたんだ。
小松　家にいててもしんどいばっかりやろ。回りはやいのやいの言うし。
ヨシマサ　同情のつもりか。作戦立て直して出直してこいや。
小松　君、破防法て知ってるか、破防法。新聞は読んでるやろ。
ヨシマサ　知らん知らん。
小松　今までのカゴの中から新しいかごに移されるわけや、君らは。
ヨシマサ　違う。強制的にお前らがカゴの外へ追い出そうとしてんのや。
小松　ああ、なるほどな。…あんな不衛生なカゴの中でも君らには居心地がええわけか。
ヨシマサ　おい、兼光。
兼光　（カゴに向かい）人生にもしもう一度あの時あの瞬間をやり直せたらということ

とはない。あなたのかけがえのない人生は二度と同じ条件で繰り返されることはない。人生において、追試験は不可能である。
小松　いや、その通り。君らの勧誘マニュアルは何回聞いても納得やな。
ヨシマサ　嘘つけ。
小松　いや、僕は君らの敵と違うで。むしろ理解者やと思うけどな。理解したうえでここに寄せてもうてるわけや。
ヨシマサ　おい、こいつの言いなりになって戻ったら殺されるぞ、兼光。
小松　あっ、やっぱり君ら平気で人殺すんか。
兼光　いや、俺はこいつの出世のために利用されるわけじゃない。自分の意思で戻るんだ。
小松　ま、いわば取引やな。一生塀の中で終わるか。内なる信仰のために生きていけるか。
ヨシマサ　だまされるな。お前は何もやってへんねん。
小松　いや、それはわからんで。捕まった連中の取り調べは進行中やし、調書の中に兼光くんの名前チラホラ…。
ヨシマサ　嘘や。
小松　それは言い切られへん。だいたい君らの記憶自体が怪しいんやから。
兼光　…お前、何でここに戻ったか覚えてるか。
ヨシマサ　……。
小松　自分の意思で戻ったわけと違うやろ。強制捜査の時、グッタリしてるところを運び出されたんやから。
ヨシマサ　…それがどうしたんや。

小松　何の罰であんな薬づけにされてたんや。
兼光　抜けだそうとして連れ戻されたんだ。…母親に会いに行こうとして。
小松　お母さんも会いたかったやろなあ。…ま、どこの組織でもヒラは大変や。犯した罪は償わなあかん。成績上げられへんかったら配置換え、減棒、果ては解雇。
ヨシマサ　お前かって歯車やないか。
小松　歯車？
ヨシマサ　そうや、社会の歯車やろ。
小松　それは当たり前や。組織が求めてんのは僕の専門技能と仕事の能力だけやろ。たとえば僕が出勤途中で事故かなんかで突然死んでも、明日から代わりの僕と同じくらいの能力の奴が僕の机に座ってる。そんだけや。
ヨシマサ　お前、…そんなんで楽しいか。
小松　楽しいとか関係ないんよ、実際。今の社会はあんたなんかいらん、交換可能の部品としてのあなたなら必要や言うてんのやから。
兼光　だから必要なんだよ、俺たちが。
小松　そうそう、そういうこと。
ヨシマサ　ちょっと待て。お前こいつのスパイ引き受けるんやぞ。
兼光　そうじゃない。俺たちが正しいってことをこいつにわからせるんだ。
ヨシマサ　それが情報提供やろ。
小松　いやいや、言いにくいことは言わんでええねん。内部に情報提供者を持ってるというだけで僕の成績は上がるから。
ヨシマサ　…お前、嘘ついてる。
小松　あっ、僕の心が読める？　透視能力やなあ。ついでに僕の前世も見てくれへんか。

ヨシマサ　ホンマのこと言うてみい。
小松　いや、実際僕も自分らの気持ちはわかるよ。もっとええことある思てたもん、こっから先。言うたら日曜日の夕方の気分やな。土曜日は明日は何しよう何かある、思てわくわくしてんのに、日曜の夕方になってサザエさんのテーマソング聞いてると、何か虚しいなったもんなあ。何もない繰り返しがまた明日から始まるんか思て……。
ヨシマサ　……。（小松のネクタイに手を掛ける）
小松　何や、どうすんの。
ヨシマサ　おい、兼光手伝え。こいつ抑えろ。
小松　もっと楽な方法にしてえや。注射器使うとか。
兼光　お前、コウモリの話って知ってるか。グリムだったかイソップだったか…。
小松　（手を合わせ）さ、準備はできたで。ほれひと思いに。
兼光　昔むかし、鳥の国とケモノの国が戦争をしてるんだ。コウモリは鳥の国が優勢になれば、私には羽がありますと言って鳥の国につき、ケモノの国が優勢になれば、いや実はケモノですと言ってケモノ側につく。やがてある日、二つの国が仲直りした時、ついにコウモリは誰の相手にもされなくなるんだ、どちらからもな。
ヨシマサ　俺はコウモリか…。
小松　いやいや、他人の後ろついてモノマネばっかりしてるオウムとちゃうか。
兼光　俺たちはカナリヤとして生きるんだ。今なら戻れるぞ。
小松　戻ってみたらどうや。予言にあるんやろ。後何年かしたら鳥の国の王様がカゴ抜けして復活する。ほんで自分らの楽園が訪れるいう予言が。
兼光　ケモノたちは俺たちにひれ伏す。いや、いなくなるんだ。

ヨシマサ　アホ。お前がコウモリやないか。こんなケモノの言いなりになって…。食い殺されんのもわからんのか。
小松　よっしゃ。ひとつ僕が予言しよ。君らは戻る。ほんで僕とたまに食事して、ちょっとしゃべる。
ヨシマサ　大はずれや。
小松　ほなもうひとつ予言しよ。近い将来破防法は君らに適応されるやろ。君らの逃げ場はなくなる。
ヨシマサ　そしたら俺らいらんやろ。お前のメシのタネにならん。
小松　さあ、ところがや。君らの仲間はそう簡単にはあきらめへん。コソコソ隠れてまた何かやらかそうと準備を始める。そこで君らが必要となるわけや。
ヨシマサ　聞いたか、兼光。こいつやっぱりお前を利用しようとしてる。
小松　兼光くんだけとちゃう。君も戻るんや。
兼光　…おい、腹が減った。何か食わしてくれ。
小松　何や、さっき遠慮してたんか。カツ丼では足りんかった？
兼光　いや、もう胃の中が空っぽなんだ。まるで食った気がしない。
小松　よっしゃ、ええで。なんぼでも食べさしたる。今のうちに食っとかんとな。あっち戻ったらロクなもん食われへん。
ヨシマサ　何か食うもん持ってきたるわ。ちょうど昼や、何かある。
兼光　いや、いい。お前の家のメシはもう飽き飽きだ。
小松　ほな、僕の手料理ごちそうしょうか。中華やったら自信あんねん。同僚は僕のこと公安の周富徳て呼ぶくらいや。フルコースでいこか。
兼光　ああ、それでいい。だが、鶏肉だけは抜いといてくれ。共食いはごめんだ。

小松　いや、それは困ったな。僕の得意料理は鳥料理なんや。鳥が使えんとなるとフルコースは作られへんなあ。
兼光　何でもいいんだ。この空腹を満たせる物なら…。
小松　それでどうや。…そのカナリヤ。焼いたらコリコリしてうまいで。
兼光　やめろ。
小松　僕の金で買うたんや。どうしようと僕の勝手やろ。
兼光　これは俺のもんだ。俺なんだ。このままカゴの中にいさせてやってくれ。
小松　気が変わった。返して。
兼光　やめてくれ。
小松　そんなん言うても、それ料理せんと君の空腹は満たされへん。
兼光　……。（ヨシマサに）おい、何か持ってきてくれ。何でもいい。
ヨシマサ　家のメシには飽きたんと違うんか。
兼光　悪かった。訂正する。
小松　なあ、君。ちょっと台所借りてええか。
ヨシマサ　何すんねん。
小松　ちょちょっとカナリヤ湯がいてくるし。
兼光　もういい。俺は何も食いたくない。
小松　やせ我慢はようないで。自分の欲望には忠実にならんと…。
ヨシマサ　兼光、お前は俺と一緒なんや。得体の知れん不安に脅えてるだけや。落ち着くまでここにおったらええ。…な。
小松　いやあ、美しいなあ男の友情。僕も混ぜてほしいなあ。
ヨシマサ　アホ。俺らとお前は種類が違うんじゃ。このケダモノ。

小松　いやいや、古いわ、そういう考え方。自分らは美しく、回りは汚い。そういう職業で人を差別するような言動はやめてほしいなあ。…あ、君ら無職か。それとも職業欄に宗教家って書く人？
兼光　俺たちは鳥だ。
小松　あ、そうそう鳥やったな。カゴの鳥。
ヨシマサ　出て行けイヌ！
小松　わかったわかった。そう吠えんでもええやろ。犬は僕の方なんやから。
兼光　…これ、お前が面倒みてくれないか。カゴの回りでイヌが嗅ぎ回ってる。イヌは俺が連れていくから。
小松　おいおい、急に飼い主面されても困るなあ…。僕がクサリつけて散歩させてんねんからな、君を。
兼光　（小松に）なあ、もう帰ろう…。腹が減った。
小松　わかったわかった。さっきの定食屋に戻ろか。
ヨシマサ　兼光行くな。
兼光　…毎日水とエサを与えてやってくれ。そうすればもう少しは生きられるかもしれん。
小松　（シャッターに近づき）あっ、雨降りそうやなあ…。
ヨシマサ　お前の予言はハズれる。
小松　いや、これは予想や。予想と予言をゴッチャにするのはよそうや。あっ、ナイスなシャレ。
兼光　駄ジャレはよそうや。
ヨシマサ　兼光はお前の手先にはならんぞ。

小松　ほお、自信たっぷりやなあ。けど断言したらはずれた時が恥ずかしいで。そういうジャーナリストの多いこと。
兼光　おい、行こう。
ヨシマサ　…お前、これからどないするつもりや…。
小松　大丈夫大丈夫。心配せんでええ。僕がちゃんと送り届ける手はず整えるから。…それまでは、こうやってちょくちょく散歩に連れてくるわ。
兼光　水とエサを忘れないでくれ。頼んだぞ。
ヨシマサ　勝手にせえ。
小松　ここ、開けとくか。それとも閉めとく？

ヨシマサ、シャッターを降ろす。と、後ろに智子が立っていた。持ってきた本をヨシマサに差し出す。ヨシマサ、本を開く。

ヨシマサ　ああ、一体どこなんだ。どこへ行ってしまったんだ。おれの過去は？　おれが若くて、快活で、頭がよかったあの頃は？　おれが美しい空想や思索にふけったあの頃。おれの現在と未来が希望にかがやいていたあの時代はどこへ行ったのだ？　なぜわれわれは生活を始めるか始めないかのうちに、もう退屈で灰色な、つまらない、無精で無関心な、無益で不仕合わせな人間になってしまうのだろう。この町ができてからもう二百年になる。現在十万からの人口があるが、そのうち一人として、ほかの連中とちがった奴はいない。…ただ食って飲んで眠って、そして死んでいくのだ。またほかの連中が生まれて、やはり食って飲んで眠って、退屈ぼけがしないように、卑劣な陰口や、ウォッカや、カードや、訴訟道楽で、生活をまぎ

らす。そうした俗悪きわまる親たちの影響は否応なしに子供を毒して、神々しいひらめきはだんだんに消えて、やがて父親や母親と同じような、おたがい似たり寄ったりな、哀れむべき亡者になって行くのだ。

いつの間にか雨が降り出す。

智子　ありがとう。私のこと哀れんでくれてんのやな。
ヨシマサ　ああ、いつまでも何にとらわれてんのや。
智子　ゆっくりお休み。もうじき雨も上がるやろ。そしたら私も行くし。
ヨシマサ　（クシャミ）
智子　風邪ひいてしもたんか。せめて暖こうしとかんと。（行きかける）
ヨシマサ　どこ行くねん。
智子　ちょっと毛布取りに行くだけや。（去る）

シャッターが開き、傘をさした仁が入ってくる。手には新聞包みの弁当。ヨシマサ、座席に横になって寝たふり。

仁　（ドアをノック）おい、ヨシマサ。メシもう済んだか。…わし弁当持ちで出かけたんやけど、持って帰ってきたんや。お前に食わしたろ思て…。ハシつけてないんやけど、いらんか。…そうか。わしもいらんのや。どうも食欲無うてなあ。いや、別にマズいから食わんのと違うで。礼子が作った弁当や。マズいわけあれへん。…放かしたらもったいないし、…かというて明日まではもたんしのう…。今、お茶持

ってこい言うてあるし…。

信子、財布を持って入ってくる。

信子　あれ、小松さん帰ったん？
仁　小松？　誰やそれ…。
信子　ほれ、公安の…、毎日来てる。
仁　ああ、わしは知らんで。
信子　何、お父さん寝てたんと違うの。
仁　何でこんな時間にわしが寝んとあかんのや。
信子　何でて、さっき寝る言うてたやんか。パジャマで。
仁　アホ言え。今日は月曜日やぞ。裁判所行って、今帰ってきたとこやないか。
信子　…お父さん、何か悪い夢でも見てたんか。
仁　お前こそ何を言うてんのや。朝、傘持たしてくれて、見送りしてくれたやないか。
信子　もういっぺん寝た方がええわ。お父さんだいぶん疲れたまってんのと違う？
仁　…わしはええ。お前こそ若いのに…。まだボケんのはちょっとばっか早いぞ。

礼子、コーヒーを運んでくる。

仁　おい、礼子。…今朝わしに弁当持たしてくれたやろ。
礼子　…お姉ちゃん、何の話？
信子　いや、お父さんが今日は月曜日やて…。

礼子　（笑って）お父さんコーヒーでよかった？
仁　…（考えて）いや、コーヒーではあかんのや。弁当とコーヒーでは、…あわん。
礼子　弁当？
仁　そうや。これお前が今朝わしに…。
信子　今日は日曜日やで、お父さん。さっき真理の友だちにあいさつして、ほんで寝に行ったんと違うんかいな。
仁　それは昨日の話やろ。
礼子　コーヒー入ったで。冷めんうちに…。はい、お父さん。（カップを手渡す）

なんとなく気まずい空気のまま、コーヒーをすする三人。

礼子　お兄ちゃん、寝てんの。
仁　え、ああ。そうみたいやな。
礼子　毛布かけてあげんと風邪ひくなあ…。
信子　毛布取りこんどいたで。雨降ってきたから。
礼子　あ、ありがとう。ちょっと取ってくる。

ドアが開き、毛布を持って智子入ってくる。

礼子　あ、風やろか。さっき閉めたのに。
信子　お母さんと違う？
仁　ま、コーヒー飲んでからにせえ、礼子。

礼子　うん。（ドアを閉めつつ）ほんなら…。
仁　お前ら弁当食わんか。
礼子　ああ、私はいい。さっきお好み焼き食べたから。
信子　それ、どこの弁当？
仁　いや、礼子が今朝…。
信子　お父さん、ちょっと熱はかろか。
仁　いや、わしはしっかりしてる。…そや、夕べ日向くんから電話あってな、明日から五時上がりにさしたることにしたから。
信子　何で…、それで手ぇ足りんの？　片づけとか。
仁　ああ、まあ、わしがやったらええだけのこっちゃから…。
信子　あんまり甘やかしたらあかんで、あの子。
仁　別に甘やかしとらへんわい。専門学校通うそうや、夜間の。
信子　何で急に…、そんなん。
仁　いや、前から考えとったらしいわ。建築の勉強したかったそうや。
信子　へえ、初耳。
仁　頼りない思とったけど、あれでなかなか立派なもんや。ええ根性しとる。

智子、ヨシマサに毛布を掛けてやる。

信子　お父さん、何か考えてるやろ。
仁　何かて何や。
信子　ヨシマサあかんから、日向くんに後継がそうとか。

仁　アホな、誰がそこまで。
礼子　ええやん。お姉ちゃん日向くんと結婚したら。
信子　あんたなあ、…よう言うわ。
仁　お前はどうや礼子、日向くん。
礼子　いや、私は…。
信子　ほれみい。お父さん図星やろ。いらん計画やめとき。
仁　…礼子、仕事やめて一週間経つけど、どうや、何か新しい仕事ええのありそうか。
礼子　いや、別に探してへんし…。
仁　今なあ、仕事で行ってる保育園、園長がええ人なんや。わしの娘が保母の免許持ってる言うたら、今度会うてみたい言うてくれてな。
礼子　それ、私のこと？
仁　そうや、お前のほかにおらへんやないか。
礼子　…私、保母やれる自信ないし。
仁　ほな、ボチボチ結婚のことも考えぇ。…ボチボチ将来の設計も考えていかんとな。…お母さん心配して成仏でけへん。
ヨシマサ　（起きて）責任だけで説教するな。日向でも誰でも後継がしたらええやろ。
仁　おう、起きたか。弁当食わんか。腹減っとるやろ。
ヨシマサ　いらん。
智子　あんたはあんたの生きたいように生き。別に腹立てることあらへん。
ヨシマサ　腹立つやないか。何でも自分の勝手になる思てんのや。
智子　そんなこと言うたら、あんたかてそうやろ。
ヨシマサ　俺は違う。

礼子　お兄ちゃん誰としゃべってんの。
ヨシマサ　…おかんや。ずっと俺のまわりウロウロしよる。
仁　…そうか。お前もいろいろ反省してんのやな。
ヨシマサ　何が。
仁　お母さんに心配させたこと気に病んどるんや。それでええ。心の中でお母さんの声、よう聞いてみい。
ヨシマサ　俺、戻るわ。
信子　どこに。
ヨシマサ　決まってるやろ。家に居てんのは耐えられへん。
仁　お母さんそんなこと言うとるか。
ヨシマサ　おかんは関係ないやろ。俺の意思や。
仁　ま、落ち着け。おい、礼子、コーヒー入れたってくれ。
信子　あんた、今度出ていったら知らんからなあ、家族の縁切るで。
仁　信子。
礼子　はい、お兄ちゃんコーヒー。
ヨシマサ　（一口すすり）あつっ…。
仁　お前これからどうするんや、ヨシマサ。
ヨシマサ　ここには居てられへん言うてるやないか。
仁　それからどうする。
ヨシマサ　ずーっと行くだけや。
仁　何かになりたいとは思わへんのか。
ヨシマサ　あんたの跡は継ぎたない。

仁　何でや。
ヨシマサ　工務店では世の中変わらん。
仁　そんなことない。設計して家建てて、…必要な仕事やで。…まあ、うちみたいな小っさいとこでは修理の仕事の方が多いけど。…屋根直して、壁塗って。人いうのはいっくらえらそうに言うても屋根がないことには暮らしていかれへん。…わしができたんはここまでや。跡はお前が大きいしていったらええ。
ヨシマサ　そんな理屈、子どもの時から百ぺん聞いたわ。
仁　ほな、政治家にでもなるか。一生懸命勉強して。
ヨシマサ　世の中変わらんのは政治家のせいや。
仁　山口先生に口きいたるわ。秘書でもして勉強さしてもうたらどや。
ヨシマサ　たかが市会議員のどこが先生やねん。話にならんわ。
仁　ほな、お前何がしたいんや。
ヨシマサ　礼子、パンツとシャツと靴下とな、寝袋持ってきてくれ。俺出ていくわ。
礼子　お兄ちゃん。
仁　ヨシマサ、お前わしの気持がわからんのか。
ヨシマサ　どんな気持ちやねん。子ども四人この年まで育ててきた自分をえらい言うて欲しいんか。ありがとう言うて欲しいんか。
仁　お前ほんまにわしの子か。自分一人で大きいなったような顔しやがって！
ヨシマサ　俺が信じてんのはあの人や。あの人しかおれへんねん。あの人は俺の全部を受け入れてくれたんや。
仁　…アホ。お前みたいな大人になりきれん子どもの出来損ないに何がわかる！　わしの苦労がわかってたまるか！

ヨシマサ　ああ、わからん。…そやから出ていくんや。…なぐれや、なぐってみろや。
信子　（ヨシマサの頬を打つ）出ていき。もう二度と帰ってくんな。

真理、カメラを持って入ってきている。

真理　みんな、こっち向いて笑って。

フラッシュ、一同ストップ。

智子　（『若者たち』２番の最初のフレーズを歌う）
ヨシマサ　おかん、歌てる場合か。
智子　あんたがまだ私に抱かれてる時に流行った歌や。
真理　お母さん、何かみんなもめてるけど…、誰が悪いの。
智子　さあ、だれが悪いんやろな。
ヨシマサ　（歌の続きをがなり立てる）
真理　何歌ってんのよ、お兄ちゃん。
智子　そうか、あんたはまだ生まれてへんか、この歌流行ったとき。
真理　歌は知ってるで。
智子　サン、ハイ。
真理　歌うの。（母うなずくのを見て２番のサビを歌う）
ヨシマサ　それでも行くねん。
真理　どこ行くの。

智子　あんた、お父さんの言われへんかった気持ちはなあ。（父の肩に手を置く）
仁　…それが言葉にならんのや。
ヨシマサ　口に出されてもケツかいなるわ。歯浮くで。
真理　愛やで、愛。それは。
ヨシマサ　ケッ、そんな言葉は嘘いつわりと同じ意味や。
智子　嘘いつわりでは、あんたら生まれへん。
ヨシマサ　ほな、嘘いつわりで育てられたんや、俺らは。
智子　嘘いつわりはもう言わんでええ。ほんまのことだけ言い。
真理　愛なあ…愛か。
ヨシマサ　真理、愛なんてもんはなあ、ここにはない。お前もこんな家早よ出て行け。
真理　お兄ちゃんは愛に背を向けるんや。
ヨシマサ　アイアイてなあ…猿みたいに繰り返すな。
真理　猿にも愛はあるんやろか。
ヨシマサ　とにかくなあ、ここにはないねん。そんなもん。
智子　ここになかったら、どこ行っても一緒や。そんなもん。
真理　お母さんは知ってる？　愛。
智子　愛なあ、あんまり口には出さん言葉やからなあ、…歌の文句にはようあるけど。
真理　私なあ、このごろ彼氏に言われるねん。お前は愛が足りんて。
智子　それはお母さんに聞いてもわからんわ。その人に聞かんとわからへん。
真理　そうか…。
智子　そうやろ。
真理　なあ、あと一枚残ってんねん。お兄ちゃんとお母さんと一緒に並んで。撮った

げるわ。早よぉ。

ヨシマサ、ぎこちない笑顔を作る。フラッシュ。
仁、信子、礼子、魔法が解けたように動き出す。

仁　礼子、ちょっと水くんできてくれへんか。喉かわいた…。
礼子　（兄のそばを離れがたく）…うん。
仁　いや、自分で行くわ。お前らヨシマサとよう話せえ。
真理　何？　面倒くさい話？
仁　真理、お前もヨシマサとようしゃべったってくれ。
真理　私あかんねん。ユキちゃんとカオリちゃん駅まで送っていかなあかんし…。
仁　そうか…。（階段を上る）
真理　（姉たちに）ああ、二人ともお好み焼きムッチャおいしかった言うてたで…。
（コッソリ母に）ほなお母さん、また後でな。まだ居んのやろ。
智子　うん。そろそろ行かんとあかんのやけどな…。
真理　そう。

真理、仁の後に続いて去る。

礼子　お兄ちゃん、さっき言うたん嘘やんなあ。出ていかへんやんな。
ヨシマサ　礼子、真理になあ、ここ稽古場で使てええ言うといてくれ。俺、おらんようになるから。

信子　あんた、ここは誰の家や思てんの。
真理　（走り出て）お姉ちゃん、お父さんがひっくりかえった！
信子　ひっくりかえった⁉
真理　台所でコップの割れる音がして、行ってみたら…。
信子　（階段を駆け上がる）礼子、何してんの。あんたもおいで！
礼子　お兄ちゃん、私…。
信子　礼子！

三人姉妹、中へ。
ふいに地下鉄の音。兼光現れる。父のおいた傘を取り、弁当の包みを床に置く。傘を高々と差し上げ…。

ヨシマサ　おい、やめろ兼光！
兼光　止めるな。俺の使命だ。

園部現れ、ひとつ手を打つ。

園部　暗転です。

急速に溶暗。暗闇の中で声。

園部　暗転とは、主にその場面の終わりから次の場面への時間経過や場所の変化をあ

らわすための舞台効果で、いわばひとつの区切りのようなものです。次に照明が入った瞬間、そこに現れるのが百万年後の宇宙都市であろうと、火星であろうと木星であろうと、また一億六千万年前の恐竜が跋扈する世界の出来事であろうと、観客たちは少しの疑問も持たずにそれを受け入れると、舞台の創り手たちは信じています。けれども私はこう考えます。太古の昔から人は深い闇と対話してきたのではないかと。人は深い夜の闇の中で神と出会い、陽の光の下で犯した罪を悔い、いつわりや、あやまちに苦しみ、もだえ、慰め、抱き合い、交わり、増やし、育て、今日まで繁栄を誇ってきたのだと。舞台における暗転も、そのためにしつらえられた効果に他なりません。深い闇の中で観客は思考を停止しません。

…１９９５年３月２０日の朝、私のお父さんの会社の部下の友だちのお父さんが、東京の地下鉄で亡くなりました。

…二十世紀、世界で虐殺された人間は一億五千万人に達するそうです。これは自然災害や天災を含みません。人は人を殺す生きものです。

溶明。

ヨシマサ、無心に弁当を食べている。

大きめの荷物を肩にかけ、兼光立っている。

兼光　…何をノンキにメシなんか食ってんだ。

ヨシマサ　ごっつ腹へったから…ずっと眠ってて。…お前半分食うか。

兼光　（中を見て）こんなもの、どうしたんだ。

ヨシマサ　起きたら置いてあった。もったいないから…。
兼光　見境なく食いやがって。
ヨシマサ　…お前ごっつ腹減らしてたぞ。…女装して、カナリヤまで食わされそうになってた。
兼光　…お前の夢の話なんか聞いても始まらん。
ヨシマサ　夢とちゃう。魂が抜けだしてたんや。俺の体から。
兼光　どこへ行ってきた？
ヨシマサ　…さあ、遠い昔や。ありえへん時間の中に迷い込んどった。…それで、ごっつ腹減った。（無心に食べる）
兼光　…俺たちだけだな。もうここに残ってるのは。
ヨシマサ　ああ、みんな今朝のバスで出ていったからな。
兼光　お前寝てたんじゃないのか。
ヨシマサ　言うたやろ。寝てた俺は抜けがらや。…上の方から見てた。
兼光　お前はどうする。
ヨシマサ　お前は出ていくんか。
兼光　いや。
ヨシマサ　ほな、その荷物何やねん。
兼光　どこへも出ていけないだろう。ここから一歩外へ出ても村だ。村から離れて富士山が見えない土地に入ってもそこは街だ。街から離れて海へ出ても、またどこかの港のある村に着いてしまう。
ヨシマサ　…２００１年宇宙の旅。
兼光　何だ？

ヨシマサ　いっそ宇宙にでも行ってみたらどうや。
兼光　同じだ。目的がなければ船は海へ出ない。結局どこかの似たような星にたどり着いてしまうだろう。
ヨシマサ　２００１年か…。
兼光　結局世界は終わらなかった。…このまま漂っていくしかないんだ。
ヨシマサ　何かこうやってると、世界に俺らだけ残されたみたいやな。…アダムとイブか…。
兼光　よせ、気持ち悪い。
ヨシマサ　楽園には誰もおらへんようになってしもた。俺ら以外はな。
兼光　お前はどうするんだ。
ヨシマサ　わからん。（弁当を食う）
兼光　明日になったら強制的に追い立てられるんだぞ。
ヨシマサ　行きたいのやったら行けや。
兼光　…ああ。
ヨシマサ　（思い出して）踏切の音が聞こえるんや。電車が通り過ぎると俺が立ってる。駅前のロータリーにな。タスキがけに白手袋。誰一人足を止めずに通り過ぎていくんや。口の端っこに薄ら笑い浮かべてな。
兼光　…じゃあな。（立つ）
ヨシマサ　外国か…、どこや。
兼光　…わからん。俺は漂っていくだけだ。この国と同じようにな…。
ヨシマサ　モスクワか、ニューヨークか。
兼光　黄色い肌の仏教徒がそんなところになじめるか。

ヨシマサ　…、また会おうや。次生まれ変わったらな。どっかの国で。
兼光　お前一人が転生を繰り返せ。俺は輪廻から解放されるんだ。
ヨシマサ　黄色い肌の仏教徒がか？
兼光　…黄色いカナリヤはもう死んだよ。

兼光シャッターを開けて出ていく。
奥の扉より別所、園部出る。

別所　あっ、おじゃましてます。あの、頼まれてたタスキ、一応できたんですけど。
園部　ちょっと真理ちゃんが書き間違えてしまって、…お兄さんの名前、義正ですよね。
別所　真理ちゃんが正義って。…今、書き直してますけど。
日向　（入ってきて）あの…、すいません。
別所・園部　あ、どうも。
ヨシマサ　何あやまってんねん。
日向　いや、大将迎えに来たんですけど…。車で…。ここで待っとけって…。
ヨシマサ　しゃあない。（二人に）呼んできたって。
日向　いえ、もう支度したはりましたんで。
別所　ああ、えっとあの…。ちょっとお兄さんに見てもうたほうがええんちゃうかな、タスキ。
園部　ああ、うん。もしダメだったら作り直しますから。手直しは衣裳で慣れてますんで。

信子　（入ってきて）ああ、日向くん。もうちょっと待っといてな。表の階段降りてくるから。
日向　ああ、はい。
信子　こっちの階段急やから危ないねん。（奥へ行こうとするヨシマサに）あんた、あんまり変なことその子らに頼みなや。
ヨシマサ　俺が頼んでんのちゃう。この子らの厚意や。
園部　ああ、ホントにそうなんです。いつも稽古場にお借りしてるお礼で。
信子　どうでもええけど、あんた近所で評判になってんねんからな。格好悪うて買い物にも出られへん。
ヨシマサ　ええやないか。興味持ってもうてんのや。

ヨシマサ、二人とともに奥へ。
日向、信子互いを意識してか、しばし沈黙。

日向　あの…、今度の日曜なんですけど、お芝居行きはります？
信子　ああ、真理のか。行くけど。
日向　僕もチケット買うてるんです。
信子　そう。えらいもん買わされたな。
日向　いえ、…終わってからでいいんですけど、…ちょっと話ありまして…。
信子　何、今ではあかんの。
日向　はあ、…ちょっと言いにくいことなんで。
信子　何よ、言いや。また借金？

日向　いや、それはもう全部…。
信子　ほな、何よ。
日向　気ぃ悪うされたら困るんで。
信子　…私が気ぃ悪いて何。
日向　いや…。
信子　はっきりせん人やなあ。
日向　学校の方、来年卒業なんで、僕もそろそろ…。
信子　あ、給料上げて欲しいんか。
日向　いえ。
信子　卒業したら社員になんねんから、給料のことくらいうちも考えてるよ。
日向　やっぱり今度の日曜日、終わってからお茶でもして。
信子　何よ。（期待して）言い出したんやから言いや。
日向　実はやめさしてもらいたいんです。
信子　……何で。…お父さんが入院するから？
日向　いえ。
信子　…そらあんたバイトやけど、そんなん急に…。
日向　すんません。別のとこ内定しそうなんで…。
信子　大きいとこ。
日向　はあ、…ここよりは。

父の階段を下りる足音。

信子　…お父さんには黙っといてや、約束して。

礼子に手を引かれ、仁入ってくる。そばには智子の姿。

仁　すまんなあ、日向くん。いっつも送り迎えまでさせて。
日向　いえ。
仁　ほんでもまあ、今日でそれもしまいや。入院したら、しばらくは帰ってこれん。
信子　お父さん、何言うてんの。
仁　智子…、お前病院までついてきてくれるんか。
智子　そうや、ずっとついてたるわ。
礼子　お父さん、私は礼子。
仁　いやいや、智子がいてんのや。夕べからな。
日向　そしたら大将、車ここまで回してきますわ。ちょっと下の方に停めてますんで。
仁　ああ、すまんけど頼むわ。
信子　日向くん。
日向　わかってます。
仁　何や、内緒はあかんで、内緒は。
礼子　お父さん、ちょっと腰降ろしたら？
仁　ああ。（日向の背中を見送りながら）まあ、わしが入院してもあいつに任しといたら安心や。なあ、信子。
信子　…そうやなあ。
仁　ヨシマサはもう出ていったんか。

礼子　まだいてるやろ。八時からしか立たれへんはずやから。
信子　あの子やったら真理の部屋にいてるわ。
智子　真理は夕べ夜中までここで練習やて。
仁　おう、そうか。…そら元気のええこっちゃ。
礼子　誰としゃべってんの、お父さん。
真理　（奥から出て）あ、お父さん見て見て。
ヨシマサ　（“無所属　長南義正”と書かれたタスキをして出てくる）
仁　おう、よう出来てるやないか。それ、真理がこしらえたんか。
真理　うん。カオリちゃんとユキちゃんに手伝ってもらってん。
仁　そうか。お礼言うとかなあかんな。
真理　また今度でええよ。二人連れてお見舞いに行くし、その時でええやん。
ヨシマサ　（自転車にまたがり）ほな、行ってくるわ。
仁　おい、気ぃつけえよ。
ヨシマサ　ああ、まだ俺に張り付いとる奴おるからな…。（カゴのラジカセを鳴らす。懐かしいフォークソング。ゆっくり自転車をこぎ出す）
真理　まあ、あの楽隊のおと、あの人たちは発っていく。一人はもうすっかり永遠に逝ってしまったし、わたしたちだけがここに残って、またわたしたちの生活を始めるのだわ。生きて行かなければ、生きて行かなければねえ。…ユキちゃん、カオリちゃん、次のセリフ！
仁　お前来年卒業やろ。演劇ばっかりやってんと、ちょっとは考えぇよ。
真理　うん、わかってる。
礼子　やがて時がくれば、どうしてこんなことがあるのか、なんのためにこんな苦し

みがあるのかみんなわかるのよ。働かなくちゃ、ただもう働かなくてはねえ…。
真理　うわ、お姉ちゃん覚えてる。
信子　そら覚えるよ。毎日毎日あんたらのセリフ、部屋まで聞こえてくんのやから、何べんも。
礼子　あした、わたしは一人で発つわ。学校で子供たちを教えて、自分の一生を、もしかしたらわたしでも役にたてるかもしれない人たちのために捧げるわ。
信子　楽隊はあんなに楽しそうに、力強くなっている。あれを聞いていると生きていきたいと思うわ。まあ、どうだろう。やがて時がたつと、わたしたちの顔も、声も、何人姉妹だったかということも、みんな忘れられてしまう。でもわたしたちの苦しみはあとに生きる人たちの喜びに変わって、幸福と平和がおとずれるだろう。そして現在こうして生きている人たちをなつかしく思い出して、祝福してくれるだろう。ああ、可愛い妹たち、わたしたちの生活はまだおしまいじゃないわ。生きて行きましょうよ。
真理　楽隊はあんなに楽しそうに、あんなに嬉しそうになっている。
礼子　あれを聞いているともう少ししたらなんのためにわたしたちが生きているのか。
信子　なんのために苦しんでいるのか、わかるような気がするわ。
智子　それがわかったら、それがわかったらねえ…。

小松、鳥カゴを下げて入ってくる。
ふいに踏切の音。電車の停車音。仁はそれを車が着いたと感じた。
駅前に立つヨシマサ。

仁　ほな、ヨシマサわし出かけるからな、いってきます。

ヨシマサ　お笑いなさい！　二三百年のちどころか、たとえ百万年たったところで、人の生活はやはり元のままでしょう。それは変化せず、その持って生まれた法則にしたがって、常に一定不変のはずですが、さてその法則がなにかということは、われわれの与り知るところではないし、また少なくともとうてい知る時はないでしょう。渡り鳥。…たとえば鶴なんかは空を飛ぶ。飛んでいきます。高尚なあるいは低級な、どんな思想が彼らの頭に沸いたにせよ、やっぱり彼らは飛んでいくでしょうし、どこへ何しに行くのかは、知り得ないでしょう。たとえどんな哲学者が彼らの中に出てこようと、彼らは現に飛んでいるし、このちも飛ぶことでしょう。勝手な哲学をならべるがいい。おれたちは飛びさえすりゃいいんだ。

小松　同じことや。…人に蹴られた転がる石はカゴメカゴメのカゴの中。

真理　（奥に）カオリちゃん、ユキちゃん、始めんで！

仁、ゆっくりとシャッターの向こうへ歩み出す。見送る礼子、信子。仁に連れ添う智子。

園部、別所奥から出る。

ヨシマサ、自分を凝視する小松の視線に立ちつくす。

しかし、天を仰いで。

幕

《引用文献》
「ハムレット」　シェイクスピア／福田恒存・訳
「三人姉妹」　チェーホフ／神西清・訳

《参考文献》
「私とハルマゲドン」竹熊健太郎・著

《劇中歌》
「春夏秋冬」　泉谷しげる・詞
「若者たち」　藤田敏雄・詞